

2022年11月13日
宮崎中部教会主日礼拝
牧師 乾元美

詩編 49：6～12

ヘブライ人への手紙 7：26～28

「仲保者」

(ハイデルベルク信仰問答 第二部 問 12～15) ※問答は日々の祈りをご覧ください。

【前奏】

【招詞】 詩編 29：1～2

【祈祷】

【聖書】 詩編 49：6～12、ヘブライ人への手紙 7：26～28

【説教】「仲保者」

<人間の救い>

10月から、ハイデルベルク信仰問答に基づく御言葉の説教を聞いています。今日から第二部、「人間の救いについて」というところに入ります。

この「救い」という言葉は、「贖い」という意味を持つドイツ語で書かれています。贖い。つまり、罪を償うこと。あるいは、代価を支払って解放する、ということ。これが、「救い」の意味なのです。

わたしたち人間の救いとは、願いが叶うことや、思いが実現することや、あるいは抱えている苦しみや困難が解決することではありません。そうではなくて、「人間の救い」とは、わたしたちの罪が贖われ、赦されること。罪から解放されること。それが、救いなのです。

ハイデルベルク信仰問答の第一部では、わたしたちの罪の悲惨さを、とても厳しく見つめてきました。

本来、わたしたち人間は、極めて良いものとして、神さまに創造されました。そして人間には、神さまに喜んで応答する自由と、神さまと共に生きる恵みが与えられていました。

それなのに人間は、神さまの思いを蔑ろにし、神さまの戒めに背き、自ら神さまとの関係を壊してしまいました。そして、神さまの呼びかけに答えなくなってしまった。

そうして人間は、神さまと共に生きる恵みの場所から離れ去ってしまい、故郷を失い、樂園を失い、悲惨なものとなってしまったのです。

これが、アダムとイブの物語に示される、すべての人間の罪の姿、悲惨さです。

わたしたちの造り主である神さまは、愛と憐みの神さまです。しかしまた同時に、義なる神、正しい神であります。ですから、罪を見逃したり、あやふやにしたり、無かったことにはなさいません。

神さまは、ご自分の正しさのゆえに、わたしたちの罪を必ず正しく裁かれます。

そして、わたしたちが神さまに対して犯した罪は、永遠の刑罰をもって、体と魂において罰せられることを要求されるほどのものだ、と第一部では語られていたのです。

<罪を知ること>

わたしたちは、神さまに対して犯した自分の罪を償わなければならない。

…でも、実際の日々の中で、わたしたちは自分が神さまに対して、永遠の刑罰をもって、体と魂において罰せられるような罪を犯している、という自覚なんて、なかなか持っていないのではないのでしょうか。

人は、そのようなことを思わなくても、普通に毎日を過ごすことができます。嬉しいことも、楽しいことも、大変なことも、苦勞することも、色々あるけれども、その時その時に、自分なりに乗り越えて、そして日々は、人生は過ぎ去っていきます。

神さま、という存在を深く思うことなく。ましてや、神さまに対する罪、というようなことを真剣に考える間もなく、毎日、目の前のことに必死になって生活している。

世の多くの人々は、そのように歩んでいるのかも知れません。

しかし、自分が犯した神さまに対する罪を知らずに生きるということは。神さまが造り主であることや、自分が神さまに愛されていることや、その豊かな恵みによって命を養われ、日々を生かされている、ということを知らない、ということと同じです。

本当は、いつでも帰ってよいところがある。完全な愛で、包んでくださる方がおられる。わたしの存在を肯定し、かけがえのないものとして愛し、日々の命の歩みを溢れる恵みをもって支え、守ってくださっている方がいる。そのことを、知らない、ということなのです。

自分の力で生きている。自分の努力で日々を歩んでいる。そう信じているとき、自分の力を失ったら。努力することができなくなったら。大きな躓きや、失敗や、何もかも失うような経験をしたら。わたしたちは、途端に拠り所を失ってしまいます。簡単に絶望してしまいます。どのような時にも、愛し、守り、導いてくださる神さまを知らないからです。

それこそ、わたしたちのまことに悲惨な状態です。

しかし、本当はわたしたちの命を愛し、喜び、わたしたちの思いをはるかに超える良いご計画をもって、わたしたちを大きな御手で守り、支えてくださる方がおられるのです。

わたしたちは、この方、わたしたちの造り主である神さまを知り、この方の許にいないければならないのです。造り主であるこの方の許に帰らなければならないのです。

神さまの許にこそ、命も、力も、平安も、恵みもあるからです。

<どう償えば>

【自分自身での償いは】

今日の信仰問答の間12は、こう問うています。

「わたしたちが神のただしい裁きによって この世と永遠の刑罰に値するのであれば、こ

の刑罰を逃れ再び恵みにあずかるには どうすればよいのですか。」

「この刑罰を逃れ『再び』恵みにあずかるには」とあります。再び恵みにあずかる。つまり、わたしたちは本来、神さまの恵みに生きるべきものであった、ということなのです。しかし、罪によって、そこから離れてしまったのです。

また、「恵みにあずかる」という言葉は、この信仰問答がラテン語で書かれたとき、「和解するには」という言葉が使われました。わたしたちが、再び恵みにあずかるには、犯した罪を赦していただき、神さまと和解しなければなりません。

そのようにして、再び、恵みにあずかるには、再び、神さまの御許に帰るためには、どうすればよいのですか。そう問うているのです。

またここでは、「この刑罰を逃れ、再び恵みにあずかるには」、と尋ねています。

つまり、自分の罪に対する裁きが、この世と永遠との刑罰に値すると言われても、わたしはそれを受け止めることができない。その刑罰に耐えることができない。だから、何とか刑罰を逃れて、再び恵みにあずかるには、どうすればよいのですか、と問うのです。

しかし、答えは、神さまは正しい方であられるから、「御自分の義が満たされることを望んでおられます」と語ります。神さまは、罪を見逃したり、曖昧にしたりなさらない。罪はきちんと、完全に償われなければならない。それが、「神は、御自分の義が満たされることを望んでおられる」ということです。

それはそうでしょう。通常の裁判を考えたとしても、完全に有罪の判決を受けた罪人が、どうしたら刑罰を逃れられますか、と問うても、それは刑罰をちゃんと受けて償ってください、としか言いようがありません。

それを受けて、信仰問答は問いを重ねます。問 13「しかし、わたしたちは自分自身で償いをすることができますか。」

答えはこうです。「決してできません。それどころか、わたしたちは日ごとにその負債を増し加えています。」

…この世と永遠との刑罰を、わたしたちが担えるわけがありません。決してできません。これは、とても絶望的な回答です。

しかも、「それどころか、わたしたちは日ごとにその負債を増し加えています」と語ります。聖書は度々、罪のことを、借金、負債として表現します。大きな罪を犯しているということは、大きな負債を抱えていることと同じです。負債は、返していくしかありません。

しかし、わたしたちが神さまに対して犯している罪の大きさは、その負債は、もはや天文学的な金額になってしまっているのです。返せる見込みが、一切ない。

しかも、わたしたちは日ごとにその負債を増し加えてしまっている。返せないどころか、日々、神さまに対して罪を犯し続けている。神さまの思いに背き、恵みを忘れ、自分勝手に歩み、その負債を毎日毎日増やしていつている状態だ、というのです。

これが、わたしたちの悲惨な罪の現状です。

【他の被造物による償いは】

そこで、次の問 14 は、自分で罪を償えないなら、何か他の方法、つまり他のもので、わたしたちのために償いができますか、と問います。

「それでは、単なる被造物である何かがわたしたちのために償えるのですか。」

ここで、「単なる被造物である何かが」という言い方をしています。つまり、神さま以外の世のすべてのものは、神さまに造られた被造物です。それが、人間の罪の刑罰を、肩代わりできますか、と聞いているのです。

確かに、旧約聖書の時代に、イスラエルの民は、神さまに対して犯した罪を償うために、動物のいけにえをささげていました。しかし、それは完全な償いにはなりませんから、繰り返し、何度でも、ささげなければなりませんでした。つまり、動物のいけにえによって、人間の罪を完全に償うこと、罪を根本から解決することはできないのです。

ですから、「それでは、単なる被造物である何かがわたしたちのために償えるのですか」との問いに対して、これもはっきり、「いいえ、できません」と答えています。

そして、二つの理由を挙げています。

「第一に、神は人間が犯した罪の罰を他の被造物に加えようとはなさらないからです。」つまり、人間の罪の罰は、当然その人間自身が受けて償わなければならない、ということです。

そして「第二に、単なる被造物では、罪に対する神の永遠の怒りの重荷に耐え、かつ他のものをそこから救うことなどできないからです」と答えています。

神さまに造られたこの世のどのようなものも、罪に対する神の永遠の怒りの重荷に耐えることはできないのです。そして、他のものを救うことなど、できないのです。

それほどに、人の罪は重く、深く、深刻であるということです。

これはまさに、今日読まれた詩編 49 編に示されていたとおりです。8、9 節にはこうありました。「神に対して、人は兄弟をも贖いえない。神に身代金を払うことはできない。魂を贖う値は高く／とこしえに、払い終えることはない。」

つまり、今日の信仰問答は、わたしたちが自分で罪を解決する手段は、一切ない。神さまに対して、自分で自分の罪を償うことができない。わたしたちが自分で自分を救う方法は何もない。そう、はっきりと語っているのです。

<神さまから与えられる仲保者>

だから、わたしたちがここではっきり知るべきなのは、わたしたちの救いは、ただ神さまから与えられるものである、ということです。わたしたちが救いにあずかるには、神さまが示してくださった方法に頼るしかない、ということです。

そして、わたしたちに示された唯一の救いの道こそ、救い主イエス・キリストなのです。

これまで、わたしたち人間が、神さまに対して犯した罪を赦していただくには、完全な償いをしなければならない、ということが語られてきました。

しかも、人間が犯した罪の罰は、その人間自身が償わなければならないこと。

しかし、人間にも、ほかの被造物にも、その罰は背負いきれない。罪に対する神の永遠の怒りの重荷に耐えられる被造物は、この世の中にはない、と語られてきたのでした。

ですから、このわたしたちの罪を償うことができるのは、負債を増し加えることのない、罪のない、正しいまことの人間であること。かつ、神の永遠の怒りの重荷に耐えられる、単なる被造物以上の存在でなければなりません。

そのような方こそ、わたしたちの仲保者、また救い主となることができるお方なのです。

それが、問 15 で語られていたことです。

問 15 「それでは、わたしたちはどのような仲保者また救い主を求めるべきなのですか。」

答 「まことの、ただしい人間であると同時に、あらゆる被造物にまさって力ある方、すなわち、まことの神でもあられるお方です。」

まことの、ただしい人間であると同時に、まことの神でもあられるお方。ただそのような方だけが、わたしたちの罪を償い、神さまとの和解を与え、再び恵みにあずかせてくださることがおできになるのです。

「仲保者」という言葉が出てきました。これは、神さまと人間との間に立って、神さまとの仲を保ってください方、という意味です。

しかも一時的な仲立ちや、仲介ではありません。永遠にわたって、わたしたちと神さまとの仲を保ってください方、ということです。

そのためにこの方は、まことの人間となられ、わたしたち人間のすべての罪を背負い、この世と永遠との刑罰を、身代わりになって担い、わたしの罪を償ってくださいのです。

そしてこの方は、まことの神であられるゆえに、この人間に課せられた永遠の刑罰を、完全に背負いきってくださいることが、おできになるのです。

そのことが、今日の新約聖書のヘブライ人への手紙の御言葉に示されていました。

7: 26~27 「このように聖であり、罪なく、汚れなく、罪人から離され、もろもろの天よりも高くされている大祭司こそ、わたしたちにとって必要な方なのです。この方は、ほかの大祭司たちのように、まず自分の罪のため、次に民の罪のために毎日いけにえを献げる必要はありません。というのは、このいけにえはただ一度、御自身を献げることによって、成し遂げられたからです。」

この「聖であり、罪なく、汚れなく、罪人から離され、もろもろの天よりも高くされている大祭司」というのが、まさに、まことの人となられた、まことの神の御子である、イエスさまのことです。わたしたちのただ一人の仲保者、救い主のことです。

そもそも「大祭司」とは、神さまとイスラエルの民との間に立って、民の罪を償うための動物のいけにえを献げ、神さまに執り成しをする役職のことです。民の中から選ばれる人間の大祭司は、自分自身もまた罪を犯すので、自分のためにも動物のいけにえを献げなければなりませんでした。

しかし、聖であり、罪なく、汚れなく、罪びとから離され、もろもろの天より高くされている大祭司イエスさまは、御自分の罪の償いをする必要はなく、しかも、御自分自身を完全ないけにえとして献げてくださることで、つまり、十字架に架かってその血を流してくださることで、わたしたちの罪を完全に償ってくださったのです。

このような仲保者が、救い主が、大祭司が、与えられたのは、神さまが義なるお方、正しいお方であって、わたしたちの罪が完全に償われなければならないからであり。また同時に、神さまが、自分では何をすることもできない、ただ罪と悲惨の中でもがくしかないわたしたちを、それでも憐んでくださり、愛してくださったからです。

わたしたちはこの救いを、このただお一人の仲保者による罪の償いを、ただ感謝して受け取ることはできません。

しかし、言い換えれば、神さまは、この仲保者によって与えられる救いを、この仲保者があなたの身代わりになって得た罪の赦しを、あなたは自分のものとして受け取ってよい。そうして、わたしの許に、帰ってくればよい。そう仰ってくださっているのです。

【お祈り】

天の父なる神さま

わたしたちは、あなたの御心に背いて罪を犯し、しかも自分ではその罪を担いきることのできない者です。しかし、そのようなわたしたちの罪を赦し、再び恵みを得させるために、まことの神の御子イエスさまが、まことの人となって、わたしたちの許へ遣わされたことを心から感謝いたします。

この方が、わたしたちの罪をすべて担い、完全に罪を贖ってくださいます。

救いが、ただお一人の仲保者である、このイエスさまによってのみ与えられることを固く信じ、感謝して罪の赦しを受け取り、神さまの御許に悔い改めて立ち返り、わたしたちがその恵みに、永遠に留まることができるようにしてください。

わたしたちの仲保者であり、救い主であり、大祭司となってくださった、イエスさまの御名によって祈ります。アーメン

【讚美歌】 294 「ひとよ、汝が罪の」

【信仰告白】 使徒信条

【献金】

【主の祈り】

【讚美歌】 24 「たたえよ主の民」

【祝福】 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、

あなたがた一同と共にあるように。アーメン